

9月、帝国理髪学校第2次卒業式（卒業生代表 西口又蔵）本月を期し帝理学校は都合により一時休校となる。（組合紛糾生徒減？）京都々市計画市区改正設計街路決定、日本労働党結成。

大正9年（1920）

前年度からの組合の紛糾が続く組合分裂の危機（2度目）にたったが、各部役員の山本徳次郎、市川乙次郎、村瀬清之助、谷邑吉太郎等（各創立委員）の尽力により円満に解決し納る。

4月、組合幹部改選、組合長（第6代）には原田重光再任。副組合長 内山岬。会計市川乙次郎と定め「知事認可新制度による議員制実施」等の規約改正を組合長から府へ申請す。24日、伏見区理髪組合第1回徒弟表彰第1号（組合長 船崎倉次郎、徒弟 大阪三之助）

9月11日、組合規約改正認可あり。その直後に原田組合長退任し、新制度に基く代議会（11月）において次の如く決定す。組合長（第7代）村瀬清之助、副組合長と会計兼任市川乙次郎。

11月17日、京理組合主催第1回技術競技競学大会開催。会長 原田重光、役員 村瀬清之助等。審査員 沢の井喜一、上田留吉、藤原弁吉。第1等賞金メダル 八木信一郎。卓越賞 中谷貞三（会場 京都市岡崎公会堂）

同日、京理組合教育部主催第2回講習会開催。役員 長谷川与志雄等。講師 平馬魁亮（会場 京都市岡崎公会堂）理髪料金40銭。西日本レブラ（らい病）予防として鼻腔等穴刺禁止、経済界大恐慌起る。

大正10年（1921）

11月、村瀬組合長辞任。内山岬2度目の組合長（第8代）就任。副と会計は市川乙次郎留任。内山組合長は新しく支部制を確立す（竹原富三西陣支部長となる）。第2回組合主催競技大会開催。役員 内山岬、上田留吉。審査員 八木信一郎他2名。競技種目全科（刈込、顔剃、拭取、洗髪）受賞者不詳（会場 市公会堂）共産主義拾頭、東山逢坂山トンネル開通。

大正12年（1923）

4月、景気の平常化とともに理髪料40銭と定まる。関東大震災。東京方面の理容師が京都へ来り移住す（伊達金二京理組合会計 田中其次京理組合理事青年団長 竹崎道明青年部長等）。

4月、児玉林三郎（岐阜県出身、元東京理容学校教師）が帝国理髪学校教師となる。

11月、竹原富三帝国理髪学校講師となる。府立植物園開園、新京極通市内最初舗装。

大正13年（1924）

9月、組合規約改正と学校再開のため平馬魁亮が組合長（第9代）に就任す。副 内山岬、会計及事務長 柴田富三郎。

10月、帝国理髪学校再開校（平馬魁亮校長）開校功勞者 市川乙次郎、宮永久次郎、橋幸太郎、田中栄太郎。

11月、平馬組合長辞任。後任として西尾林太郎（鳥取県八頭郡出身 元京都府書記官府市会議員 大阪朝日、毎日新聞記者）が尾崎組合顧問、原田顧問、高橋安次郎創立委員等の推挙により役員協議の結果、招請され組合長（第10代）となる。理髪料金40銭、関東より変型ヘア・スタイルの復興刈と小松刈（ショート・カット）きたり流行す。皇太子成婚記念万国博覧会開催。

大正14年（1929）

1月、組合規約改制。理髪部（組合員 804名、非組合員 約30名）と結髪部の分離。

2月、組合役員改選 西尾林太郎組合長辞職。規約改制に努力した上田留吉（京理組合創立委員）が組合長（第11代）となる。

6月、理髪検定試験制度実施（京都府）第1回検定試験委員 内山岬、細見金八。第2回検定試験委員 西口又蔵、柴田富三郎等嘱託となる。帝国理髪学校再開第1回卒業生（田中正義、安田鶴吉等19名）

6月、帝理学校の設立者を上田留吉に変更の件認可せらる。組合事務所及び学校移転（第4次）上京区下立売新町東入東立売町196番地（府庁前現在京都府防犯協会）

9月、上田組合長退任し、磯貝末吉（堀川支部長）第12代組合長に就任。副組合長 池田又三郎、会計 中西菊次郎。

9月17日、京阪神競技大会開催、主催 神戸理髪青年部。京理組合出席役員 茨木伝四郎、柴田富三郎、八木信一郎、山形常太郎等。技術参加者 品川二郎、小林栄三郎等。

10月、京都理髪新聞発刊（月刊組合機関紙）発行者 上田留吉、編集者 高草木正治。理髪料金45銭、普通選挙法公布、都ホテル竣工。

大正15年（昭和元年 1926）

2月5日、理髪矯明新報（きょうめいしんぱう。元組合幹部役員の私設発行で編集者は塩見天外京都理髪組合書記）の組合三役中傷記事記載の件。

3月、組合本部総会前組合長 上田留吉、会計主事 柴田富三郎両者より中傷記事に対する反論あり。京理組合大正期最終年度収支計算書発表（3月10日付京都理髪新聞記）帝理学校第2回卒業生（平松二一 等31名）。川端支部第1回理容教育会開催。川端警察署2階において、役員 上田留吉議員、直井兼吉支部長、奥井副支部長、吉本大吉会計